

「過去からの宿題」

エゼキエル書 13章1～7節

聖学院大学 人間福祉学部チャプレン 阿部 洋治

今日の聖書の言葉が語られたのは、民族の危機が迫っていた時代のことでありました。エゼキエルをはじめ、イザヤ、エレミヤといった預言者たちは皆、迫りつつある危機すなわち神の裁きについて警告を発しておりました。ところが、当時の指導者たちの多くは、エゼキエルたちが語ることばを聞こうとはしませんでした。自分たちは神の民だから、神が守ってくださる。だから危機が自分たちを襲うことはないと自惚れ、自己満足の平安に浸っていたのです(エゼキエル13:10)。そこでエゼキエルは、こうした人たちに向かって言います。「お前たちは、主の日の戦いに耐えるために、城壁の破れ口に上ろうとせず、イスラエルの家を守る石垣を築こうともしない。彼らは虚しい幻を見、欺きの占いを行い、主から遣わされてもいないのに、『主は言われる』と言って、その言葉が成就するのを待っている」、と。つまり、人々は、しっかりと目を見開いて自分たちの現実を見ようとはしなかったのです。それが、「城壁の破れ口に上ろうとしない」ということです。目を開けば「破れ口」が見えるのに、現実を直視せず、「虚しい幻」に心を奪われ、「欺きの占い」に心を寄せ、偽りの「平安」に浸っていたのです。近づきつつある危機を直視して、それに備え、その危機を逃れるような道を模索しようとする人は居なかったのです。それが、「石垣を築こうともしない」という意味です。

「破れ口に上る」とか、「石垣を築く」ということは、現実的には、虚しい幻や欺きの占いに酔いしれている人々に向かって、今直視すべき本当のことを語り、現実を変えて行く働きをすることでありました。たとえ人々が聞こうとしなくても、語るべきことをはっきりと語って今の自分たちのあり方を糺すことでありました。それが、迫っている民族の危機に備えることでありました。ところが、だれも本気になって本当の大切なことを語ろうとはしなかったのです。こうして紀元前587年、エゼキエルたちが警告していた危機が迫り、ユダヤ民族国家滅亡の悲劇に直面することになったのです。

ところで、この夏、日本は戦後70年という年を迎え、テレビ、新聞等々では、第二次大戦にかかわるいろいろのテーマを取り上げて報道しておりました。私もそのいくつかを見たり読んだりしました。そうした中で印象に残ったことがいくつかありますが、一番印象的だったことはNHKが制作した「知られざる陸軍終戦工作—松谷大佐の“弱気の勇氣”」という番組でした。この人は、アメリカとの戦いの戦況が思わしくない事態になりかけた時、逸早く早期終戦を唱えた人でありました。彼は、かつてイギリスに駐在していたことがあり、イギリスの事情を良く知っており、またイギリスを通して見えてくる世界の様子を知っておりました。ですからアメリカとの戦いがいかに無謀なものであったかを良く分かっていたのです。それだけに、1941年(昭和16年)12月8日の真珠湾攻撃によってアメリカとの戦いの火蓋が開かれて、最初の半年間は日本に有利に展開をしておりましたものの、やがて戦況がおもわしくなくなる中、当時作戦部戦争指導課長であった松永誠大佐は、兵力を縮小するなど、終戦に向けての準備の必

要を訴えたのです。それは、アメリカやイギリスの連合軍の実力、それに対して枢軸国として手を組んでいたイタリアやドイツの現実というものを良く知っていたからでありました。ですから、これ以上戦争を続けることは日本国の破滅に至るということをこの人は見抜いていたのです。ところが、彼は、このことで「卑怯者」呼ばわりされ、中国の戦線へと左遷されてしまいました。

しかし、昭和18年3月、松谷のことを良く知っていた杉山元(はじめ)という人が参謀本部の参謀総長になった時に、松谷は中国から呼び戻され、戦争計画の再検討を命じられることになりました。そこで、松谷は、その年の9月、日本が負けるという想定の下に終戦計画を進言したのです。ところが、どこまでも抗戦を続けるべきだとする陸軍からは猛反発を受け、この案は無視されただけでなく、松谷の戦争指導課は人数を減らされ、しかも課ではなく班に格下げされることになってしまいました。つまり、松谷は、発言力のない立場に格下げにされてしまったのです。

けれども、松谷の予想どおり、戦況はますます日本にとって不利な状況に向かって進展して行きました。昭和19年6月、フランスのノルマンディーに米英軍が上陸し、ドイツはじり貧になり、ドイツが連合軍に敗北することは目に見える事態になって来たのです。このことを知った松谷は考えました。「遺憾ながらわがほうの負けである」「帝国(日本)は速やかに戦争終結を企図すべし」、と。というのは、ドイツが敗北することになると、アメリカやイギリスがさらに一層勢いづくことになり、日本が戦い続けることはきわめて不利な事態になることを松岡は見取っていたのです。

そこで、松谷は、自分が投獄されることを覚悟で、総理大臣と陸軍大臣を兼任していた東條英機に対して戦争を止めることを直訴しました。「投獄されることを覚悟で」というのは、当時の戦争指導者たちの間では弱気を吐くことは断じて許されないことだったからです。実際、東條は松谷の提案に対して、「いやな顔をして、何も意見を述べませんでした。」そして、松谷は、その4日後の7月2日、戦争指導班を解任され、中国大陸の陸軍参謀を命じられました。再び左遷されることになったのです。このように、指導者たちは、日本がアメリカ相手にじり貧に陥って行く中にありながら、その現実に目を向けることなく、とにかく戦い続ける強気の構えを崩そうとしなかったのです。そういう中で松谷は、一人戦争をやめるべきことを提案し続けたのです。彼はこの時のことを回想して述べております。「私は周囲強気の渦中であって弱気を吐くことのいかに大勇気を要するものであるかを真に体験した」、と。

戦争指導者たちのこうした強気にもかかわらず、それから2週間後の7月18日、サイパン島が陥落されてしまうのです。日本にとっては南西諸島の大切な守りの拠点を失うことになってしまったのです。その重大さの故に東條はその責任をとって内閣総辞職をすることになりました。さらに10月にはレイテ島の日本軍が壊滅し、アメリカのB29戦闘機による日本本土爆撃が始まったのです。

こうした状況で、11月、松谷は、再び日本に呼び戻されることになりました。それから松谷は早期終戦に向けて働きかけるのですが、しかし、そうした中で、1945年には日本の主要都市がアメリカによって爆撃されて焼け野原となり、4月にはアメリカ軍が沖縄に上陸し、5月にはドイツが降伏、6月には沖縄での戦いが敗北に向かいました。しかしながら、信じがたいことに、こうした状況になったにもかかわらず、日本政府は、戦争終結の決断を下せなかったのです。そして、8月7日に広島に原子爆弾投下され、同時にこの戦争においては中立であった筈のロシアが連合軍に加わって参戦することになり、中国にいた多くの日本人が犠牲となり、かつまた中国に駐留していた大勢の兵士たちがシベリア

に捕虜として抑留されるということになりました。日本は約30万人もの痛ましい犠牲者を出して、ついに敗戦と降伏を飲まざるを得ない結果となったのです。

日本の戦争指導者たちはどうしてもっと早くに戦争終結の決断を下すことをしなかったのでしょうか。関連した研究によりますと、指導者たちの中には、早期終戦やむなしとする人たちが少なくはなかったということです。しかし、それを正式の軍事会議において主張する勇気をもった人がいなかったのです。指導者たちは、日本のおかれた現実を冷静に吟味分析して戦略を考えるのではなく、ただ勝利を信じて戦うという精神論に振り回され、戦略会議においては誰も戦争終結を主張することができなかったのです。そして、戦争終結の決断を引き延ばす中で、主要都市は爆撃を受け、大勢の沖縄の人々が犠牲になり、中国在留の日本人たちがロシア兵によって蹂躪され、兵隊たちはシベリヤ抑留の苦しみにあい、ここでも多くの人々が命を犠牲にすることになりました。そして、やがては、広島、長崎での原爆投下によってさらに日本の傷口は大きくなり、ようやくにして戦争終結に至ったのです。

私は、30万人もの国民が犠牲になるという現実を見るまで、終戦の決断を下すことができなかった人々がこの国の指導者であったということに深い憂いを覚えます。戦争指導者の多くは、これ以上戦いを続けることは無理だと心では感じていながら、少しでも光栄ある敗戦を夢見ていたために、日本の各地で大勢の人々が犠牲になっていたことを見過ごしにしたということに怒りのようなものさえ覚えます。為政者たちの幻想に基づく指導の下でこんなにも大勢の人々の命が犠牲になった過去を私たちは忘れてはならないと思います。

ところで、今、国家のために戦った軍人たちを祭るという行為を当然のように考えている人々が少なくありません。しかし、それがあの戦争を美化することにつながってはいないでしょうか。あれだけ大勢の若者たちを無駄な戦争へと送り込み、さらには失策のために、死ななくても良かった大勢の市民を犠牲にした政治の問題を私たちは直視しなければならないのではないのでしょうか。それは、勇気ある真実の声に耳を傾ける勇気を欠いた政治の問題であり、真実の声を上げる勇気を欠いた指導者たちの問題であります。この問題は、ひとりあの第二次世界大戦中の指導者たちだけの問題ではないと思います。私たちは、しばしば自分を守るために人を恐れ、真実を語ることを恐れ、真実の言葉を謙虚に聞くことができなくなるものです。これが社会や組織の腐敗をもたらし、それらを滅亡へと追いやることになるのです。

2015年10月20日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)